
『名探偵コナン　～暁への導き（リード）～』

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『名探偵コナン　　暁への導き（リード）』

【Nコード】

N0210Z

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

歩美の見た不快な夢から始まる嫌な事件…組織の仕業なのか！？まさか帝丹小学校にまで事件の波が来るとは誰も思っていなかった。「組織の仕業ならもう手遅れね、あの子達を救うことはできないわ…」

「バー口…俺はまだ蘭に話さなきゃなんねえことがあんだよ…」

あの謎の女探偵も登場！！

突如姿を現した赤井秀一…その想いは？

そして、遂にコナンの正体が蘭にバレてしまう…！？更に魔の手が蘭にも伸びる…その時コナンがとった行動とは…？「新一、ありがとう」

大阪の高校生探偵服部平次も登場！「和葉、お前は俺の初恋の相手やで？」この言葉の本当の意味とは…？

絶対に見逃せない『名探偵コナン　　暁への導き（リード）』

少年探偵団たちがとった行動…
それは幸か不幸か…。

奇妙な少女（前書き）

またまた来ました真知歌です！

毎度ありがとうございます（＊ ＊）

今回はシンゴさんと亜由美さんのリクエストを交えて作らせていただきました！

是非楽しんでくださーい！

感想まってまーす（笑）

奇妙な少女

「ハアハアハア…」

現在午前8時半

快晴の空の下でこんな穏やかな日とは正反対に青ざめた表情でランドセルを背負い駆ける一人の少女がいた

その少女は帝丹小学校へと入っていき自分の教室のドアを勢いよく開けるや否や思いつきり叫んだ

「助けて!!!」

教室にいたクラスメート達は当然意味不明な表情をしている

その内の4人は更に驚いていた

そして叫んだ少女はその4人の姿が目に入り4人の内の一人にこう言った

「どうしよう…助けて、コナン君!!!」

そう言われたコナンは目をぱちくりさせながら

「どうしたの歩美ちゃん？」

そう、朝からパニック状態の人物の正体は吉田歩美だった

「どうしたんです？歩美ちゃん」

「ちゃんと飯食ってきたか？顔色悪いぜ？」

同様に光彦や元太も心配する

「もしかしてなにか事件でもあったのかしら？」

歩美のただならぬ表情を見て軽い冗談でそう問う灰原だがまさかの返答だった

「うん！事件よ事件！大事件！！」

歩美の“事件”という言葉に思わず反応するコナン

「なに！？まさか殺人事件か！？」

嫌な予感

すると歩美は

「違うよ！そんなんじゃないやなくてもっと大変なの！！」

コナンと灰原の頭には一瞬嫌な予感がし互いに顔を見つめ合ったが次の歩美の発言に思わず目が点になる

「夢だよ！夢見たの！コナン君と哀ちゃんがキスしてる夢！！」

「へっ…？」

少し顔が赤らめるコナンと灰原

「あ、歩美ちゃん？なぜそんな夢を見てしまったんでしょうか？」

光彦も目が点になり少々焦る

「分かんないけど、コナン君と哀ちゃんが抱き合ってキスしてたの！！」

動揺しているかと思えば徐々に怒り出す歩美

「大丈夫よ、そんなこと現実的にありえないから」

そう一言灰原が言っているとコナンは横目で睨む
すると灰原は不気味に笑う

「そっか、なあ〜んだ、そうだよね!!」

といきなり笑顔になった歩美

どうやらこの事件は解決したようだ

すると担任の小林先生が教室に入ってくる

クラスメート達は皆席につこうとする

そして椅子に座りながら灰原がコナンに一言告げる

「悪夢はこれから嫌な事が待ち構えているサイン…」

「はあ？」

「私は何度見たことが…」

ボソッとそう呟く灰原をコナンは見つめる

「な〜んてねっ」

コナンに向けて冗談だとう顔をする灰原だがその表情は何処か不安でいっぱいだった

(こんな天気の良い日に事件なんか起きないわよね…)

(ましてや組織だなんて… 考えすぎね…)

序章 PART・1

教室の窓から快晴の空を見上げ灰原はそう思った

「え〜と今日は一時間目に国語のテストをします」

小林先生のその発言にクラスメート達は皆ブーイングだ

もちろん元太や光彦や歩美も

「酷すぎますよ予告もなしに〜」

「そうだよ勉強する時間ないよ〜」

「実力を試すテストです」

小林先生はウィンクしながら皆にそう言うつと更にブーイングが起きた

「んだよ、俺朝飯いっぱい食っちゃまって眠いから寝ようと思ってたのよ〜」

「元太君、それはちょっと違う気がするんですけど…」

そうしているといつの間にか朝の会終了のチャイムが鳴った

教室内では急いで勉強する者や最早諦めて遊んでいる者達がいた

そんな中で探偵団の三人は文句を言っていた

「もおゝコナン君どう思う？」

ふいに歩美がコナンへと問い掛けた

「えっ？俺？… まあゝ実力つてのも大事だしいいんじゃないか？」

「えゝコナン君も小林先生の味方なの？」

「えっ？味方ってゆうか…」

答えに詰まるコナンを三人は真っ直ぐに睨んでいた

「随分余裕なのね？まるで他人事ね？」

困っているコナンの後ろから灰原がからかいながらそう言う

序章 PART・2 黒い闇

そうしているうちに一時間目の授業開始のチャイムが鳴り響いた

「あーあ、やだな…」

「仕方ありませんね…」

「腹減ったな…」

探偵団の三人は仕方なく席につこうとした

…その時

コナンの教室の前を見たことのない40代くらいの男性が通りかかった

「ん？」

コナンは新任か生徒の親かとも思ったが次の瞬間嫌な予感が脳裏を横切った

（フフフッ…）

その男性は確かにコナンを見て不適な笑みを漏らした

（！！！？）

コナンは驚きその男性を強く睨んだ

男性は教室の前を過ぎどこかに消えたがコナンの心の内は不安でいっぱいだった

その理由は以前、黒ずくめの男達の仲間コードネーム『アイリッシュ』と戦った時にコナンの指紋付きの粘土が盗まれていたことがあった…

そう…、3日前から行方不明のコナン愛用の蝶ネクタイ型スピーカー…

蝶ネクタイ型スピーカーの脱衣は基本的に着替える時、稀に出先で外すこともあるが大抵は毛利探偵事務所か阿笠博士の家だ

3日前の夜も記憶のうちでは阿笠邸で蝶ネクタイ型スピーカーを外したはず…だが今日になっても見つかっていない

蝶ネクタイ型スピーカーのほうは阿笠博士が作り直してくれてはいるがコナンの心では黒い闇が訪問しに来ていた

序章 PART・2 黒い闇（後書き）

前回と同じような手は使わないと思ったがコナンは不安にかられていた

（もしかたあいつらの仕業だったら… 今回はやべえぞ…、蝶ネクタイ型スピーカーは確かに博士ん家で取ったはず…）

（それをあいつらがまた盗みに来たとしたら俺の居所やたぶん灰原の居所もバレちまつてる…）

（そして俺や灰原の正体までもが…）

今の今までコナンは蝶ネクタイ型スピーカーを何処かでなくしきつと何処かに置いてあるだろう、もし誰かが拾っても不思議なネクタイを興味本意で持ち帰ったり又捨てたりするだろうと思っていたがその考えは一変し恐怖に陥っていた

闇への突入（前書き）

コナンは焦った様子で椅子から立ち上がり小林先生に告げる

「先生！俺体調悪いから帰るね！！」

小林先生が止める間もなく教室を出ていく

「おいコナン！」

「ずるいですよコナン君！」

「全然体調悪そうに見えないね」

元太や光彦、歩美は不思議に思ったがすぐに三人はどうせテストが嫌になって仮病を使って帰ったのだろうと推理した

コナンのただ事ではないような表情を見た灰原は

「先生、私も体調が優れないから帰るわ」

「そ…そうなの？気を付けてね…」

小林先生は灰原が醸し出すオーラに触れられずあっさりと帰宅を許した

「哀ちゃんまで行っちゃったね」

「灰原さんも仮病でしょうか」

「せ、先生俺も腹の調子が悪いんで…」

「元太君！それはただの食べ過ぎです！」

元太も流れに乗って帰ろうとするがそこは光彦が強く突っ込んだ

闇への突入

「ちょっと！どうしたのよ？」

不気味な男性の存在を知らない灰原はコナンの後を走って追いかけて呼び掛けた

コナンは立ち止まり何かに気付いたように後ろを振り返り灰原にこう聞いた

「おめえ、さっき変な感じしなかったか？」

「え？どうゆうこと？」

灰原に先程の事を言うのは戸惑ったがもし黒ずくめの男達の仕業なら一刻を争うと思いついて言わなかった蝶ネクタイ型スピーカーのことも全てを灰原に話した

「…ってことなんだ、もしあいつらの仕業で俺を狙ってるとしたらここにいるのは危険すぎる…」

それを聞いた灰原の顔は青ざめた

「そうね…あの子達を巻き込むのは避けなければならない」

「かといってあなただけが狙われているとも限らない、あなたの正体がバレたとしたら私の正体もバレているわ、そうしたら組織は血眼になって私を見つけ出し私の周りの人間共々殺しに来るわ…」

「ああ……」

コナンはゴクリと唾を飲んだ

（蘭……）

そんな様子を見た灰原はもう一言告げた

「でも……、もし組織の仕業ならもう手遅れね……」

「！」

「今頃私達の周りの人間を調べ尽くしている頃よ……そうなるとすればあの子達を救うことはできないわ……」

暁の想い

いつになく弱気な灰原…

そんな灰原に近寄りコナンは灰原の胸ぐらを掴み物凄い剣幕でこう言った

「ぜってえに殺さねえ！！！！あいつらも…蘭も… おめえも！！！！」
「必ず俺が守ってみせる！！殺されてたまるか！！！！」

灰原は正直驚いた

だがこんな時に少々ドキツとした自分が許せなかった

（何考えての私…）

（『逃げるんじゃない…、自分の運命から逃げんじゃない…』）

あの時のコナンの言葉が蘇る

「とりあえず博士ん家に行くぞ」

「ええ」

コナンに促され灰原も阿笠邸へと向かった

その頃帝丹高校では

「ねえねえ、見て蘭」

そう言いながら園子はストラップを見せる

「かわいいー！なにそれ？」

「真さんとお揃いのー」

「へえー上手くいってるんだ！」

「お陰様でね！」

「そっか！良かったね！」

園子にはやけ顔から真顔になり蘭に尋ねた

「蘭は？」

「えっ？」

「新一君と何かお揃いの物ないの？」

「私？私は…別に恋人同士ってわけじゃないし…」

「ええー！！！？まさかまだ返事してないわけ？」

園子の言う返事とは以前ロンドンで新一に告白された時の返事だ

「まったく早くしないと誰かにとられちゃうわよ！はいはい、すぐに返事しなさい」

そうゆつと半ば強引に蘭の携帯を取り上げて新一へと発信する

仕掛ける罠

・ 阿笠邸

突然帰ってきたコナンと灰原に驚いた博士

コナンは博士に一部始終を打ち明けた

今博士はコナンに頼まれた組織の仲間、シャロンすなわちベルモットの情報をファンに紛れ込みパソコンで検索している

そんな中コナンと灰原は二人で考え込んでいた

すると新一用の携帯が鳴り響いた

着信画面を見るとそこには“蘭”と表示されていた

何かあったのかとコナンは急いで電話に出た

「もしもし？蘭か？」

博士に再度至急で作ってもらった蝶ネクタイ型スピーカーを手にとりながら

すると電話口の相手は蘭ではなかった

『私、園子！』

「園子…？蘭に何かあったのか！？」

『そうそう！大ニュースよ！　はい蘭♪』

そう言うと園子は携帯を蘭に返す

『もおー園子ったらー　あっごめんね新一……』

会話のやり取りから特に何も事件のない様子が伺えたコナンは

「わりいな、蘭……ちよつと今事件が立て込んで、また電話する！」

そう言うとコナンは電話を切ってしまった

「そんなに冷たくしていいの？」

流石に見兼ねた灰原が口を挟んだ

「……今はそれどころじゃねえ」

「……」

するとコナンは再び顎に手を添えながら真剣な眼差しで考え込み出した

仕掛けられた罠

「もおゝ何なのよ！もう絶対電話してあげないんだから！！」

園子はまただめだったのかとガツカリする

「まあそんなこと言わないでまた電話してあげなよ？」

「うん…」

蘭は切なさうにそう答え、ふと窓の外に目をやった

そこには帝丹高校の校門の前に見たことのあるような人物が立っていた

「あれ？あの人…」

（黒のニット帽… ！？）

「ん？どした蘭？」

そこには赤井秀一が立っていた

赤井は蘭が自分の存在に気付くと素早くその場を退散した

「なにしてたんだろ…」

思わずボソツと呟く

（『訳なんているのかよ？人が人を殺す理由なんて知ったこっちゃねえけど…人が人を助ける理由に論理的な思考なんて存在しねえだろ？』）

赤井を見た蘭は新一のあの時の言葉が頭に蘇った

「FBI…」

その時に赤井が着ていたコートの背中に書いてあった文字も思い出し口にした

そしてその様子を蘭と園子の隣で蘭に借りたノートの書き写しをしていた世良はしっかりと見て聞いていた

（……………）

掴んだ手掛かり

あれから15分後…

「新一！有力な情報が手に入ったぞ！」

博士はパソコンから離れコナンの元へ歩み寄った

「クリス・ヴィンヤード…すなわちシャロンは今撮影で沖縄に滞在しているらしい」

「本当か！！？」

思わず声を上げるコナン

「ああ、沖縄在住のファンが昨日那覇市でクリス・ヴィンヤードを見かけたらしい…最低でもあと3日は沖縄にいるようじゃ」

「よし！サンキュー博士！」

「あなたまさか接触するつもり？」

鞆に何やら色々と詰め始めたコナンに対して灰原が問う

「ああ」

「やめなさい！危険すぎるわ」

「…」

「あなたまさかベルモットは味方だと勘違いしてるんじゃない？」

強くキツイ一言がコナンに迫る

「今はこれしか頭に浮かばねえんだ…」

「だいたいFBIには連絡したの？私なら組織を理解し追っているFBIに一本報告を入れるわ」

「…FBIに俺等の事なんて説明すんだよ」

「それは何だつて…」

「それに何か嫌な予感がするんだ…」

灰原の言葉を遮りふに落ちない表情をしながら言う

「何か誘き出されているような…仕掛けられてるような…」

「…？」

「それともう一つ…」

「俺はあくまでもベルモットを味方だとは思っちゃいねえ… だけど敵だとも思えねえ… 俺わな？」

(!!)

その発言に灰原はコナンに全てを見透かされているような気がした

掴んだ手掛かり（後書き）

灰原は一人地下室にこもった

リビングではコナンと博士が沖縄出発に向けて話し合っていた

回想***

『シエリー…、愛してるよ』

志保の耳元でそう囁くジン

『ジンに近付かないで』

上から睨み付け志保にそう言うベルモット

『シエリー…』

『ちよつと… 痛い…（やだ…）』

拒否する志保とは正反対に不適な笑みを浮かべて襲ってくるジン

バンッ！

勢いよくドアが開きそこに立っていたベルモットは強く志保を睨み付け不気味に笑い掛けた

嫌な記憶が灰原を襲う

（お願いだから一人にしないで…）

新たな決意 盗聴編（前書き）

リビングにいる博士とコナンは早速沖縄に向かおうとしていた

そこへ灰原が上がってきた

「私も一緒に行くわ」

灰原のその言葉に驚くコナンは真っ直ぐな灰原の瞳を見つめ頷いた

「一人では行動すんじゃないぞ？」

「ええ、わかってるわ」

とその時！

阿笠邸内で奇妙な物音が聞こえた

新たな決意 盗聴編

どうやら物音はキッチンの方で聞こえた

コナンと灰原、そして博士は耳を済ます

：

すると微かに会話が聞こえてきた

（一人じゃねえな…）

ゴクリと唾を飲んだコナンはキッチンへと近付いた

オープンキッチンで人影が見えないのはきつとしゃがんでいるせい
だと思うコナンは麻醉銃を手にしキッチンの上から覗き込もうとする
が

なにやら聞き慣れた声が聞こえ動きを止めた

「…もちろん僕達も行きましょう！」

「でもバレたら叱られるよ？」

「じゃあ説得させようぜ！」

コナンは声の主達が誰だか分かったようだ

麻酔銃を構えるのをやめ上から一言

「おめえら、んなとこで何やってんだ？」

「うわあゝ」

「きゃっ」

「ひいゝ」

思わず奇声を上げる三人

「おや？元太君に光彦君？…」

「それに歩美ちゃんまで…、そんなとこで一体なにしているのかしら？」

三人は慌てた様子で弁解を始めた

新たな決意 説得編

「い、いやゝまさか盗み聞きをしていたなんて…」

「は、博士ん家にね、遊びに来たの…」

「そうだが、まさか沖縄に行こうなんて…なあ？」

「ええ、まさかついていこうとなんか…ハハハ」

まさに盗み聞きをしてこれから沖縄に行くコナン達についていこうとしていたのだと言ってるようなもんだ

「あのなあゝおめえらだいたい学校はどうしたんだよ！」

「きよ、今日は一時間で授業終了だったようですよ…？」

「そ、そうそう！」

「んなわけねえだろ？…」

コナンと灰原の後を追うように、しかし小林先生の許可が下りることはないだろうと思った三人は無断で帰宅してきたようだ

「立派なさばりね？そして許可もなく他人の家へ入り込み盗み聞きだなんて…、住居侵入罪で刑務所行きね」

腕を組み軽く笑いながらそう言う灰原が三人にはとても悪魔に見えた

「しかし三人も連れて行くというのは…」

「ああダメだ！」

「ダメね！」

「ええ、なんで？」

「まさか本当にその組織というのは強敵なんですか？」

「お前等そつからいたのかよ！」

「ああ、バツチリ盗み聞きしたぜ！」

少々困惑するコナンと灰原を他所に自信満々でそう言う元太

意外なミスリード

コナンと灰原は互いに顔を見合わせる

灰原はコナンに向けて“NO”とサインを出す

コナンは再び元太達の方を向きこう告げた

「おめえら、この沖縄の旅は厄介な組織が絡んでいるんだ…おめえらを巻き込むわけには…」

「大丈夫です！」

光彦が強くそう言った時、

コナンが所持している携帯が鳴った

着信は新一の携帯で表示は蘭からだった

コナンは蝶ネクタイ型スピーカーを片手に元太達へ背中を向けて電話に出た

「もしもし？どした？」

『あ…うつん、さっき忙しかったみたいであんまり話せなかったから…』

蘭は素直に再度新一に電話をかけてきたのだった

「ああ、わりいな…ちょっとまだ手が空きそうになくてよ…」

コナンは元太と光彦、歩美、それに灰原と博士がいる方を見てそう言う

どうやら言ってもきかなそうな三人を灰原が対処しているようだ

『そっか…、あのね新一？話したいことがあるんだけど手が空いたらでいいから…』

「わりい、呼ばれちゃった！またかける！」

蘭にまた冷たくするコナンを灰原は振り返り見ていた

『あっ、新一！』

コナンは灰原達の方へ戻りながら電話を切ろうとした
そして蘭へ最後にこう言ってしまった…

「あっそれと俺今日博士ん家泊まるから晩飯いらねえ…」

相当焦っていたのだろう…新一が言っではならないことを言っ
てしまったようだ

緊迫の名探偵

電話はすでに切れておりどうやらヘマをやらかした当の本人はそれにまだ気付いていなかった

この状況の中で更に煽りを受ける灰原と博士…

「江戸川君…いまあなた蘭さんになんて言った？」

「あん？晩飯いらねえって…」

するとまた携帯が鳴った

コナンは着信画面を確認せずにまた蘭だろうと思い電話に出た

「だから今手が離せねえって…」

だが電話の主は蘭ではなかった

それに着信のあった電話はコナン用の携帯にだった

そして新一の声で出てしまい当然電話の相手は驚くだろう

『く…工藤君かい？』

（ゲッ…？）

「た…高木刑事？」

『ああ、コナン君は?…』

「ああコナンなら隣に…います、代わりますね…」

一人二役を始めるコナンを探偵団の三人は不思議そうに見ている

「なにやってんだ?あいつ」

「とうとうきてしまったんでしょうか?」

「気の毒だね」

そんなやり取りを不安そうに見つめる灰原の表情は心配ながらも安らいでいた

だが次の瞬間その安らかな表情は恐怖の顔へと化していった

『あついいんだ、コナン君が無事なら特に用はないし…』

「えっ?どうゆうことですか?高木刑事?」

高木のその口調はコナンを不安の渦へと巻き込んでいった

開かれた扉

（もおゝ新一ったらなんなのよ！…

ん？

いま…晩飯いらないうって言った？

博士ん家泊まるって？…

まるでコナン君みたいな…！？）

蘭がぼーっとしてると後ろから世良がやって来て話しかけた

「どうしたの？」

「あっうつん…」

否定する蘭の顔は少し青ざめた様子だった

世良はそんな蘭の表情を見逃さなかった

すると蘭のクラスメートの中道がすごい声を出しながら廊下から走ってきた

「大変！！大変だー！！」

『よかった…実は今大変なんだ』

そう言う高木の後ろでは何やらとても騒がしい

「一体なにが？」

――『帝丹小学校が何者かによって爆破させられたんだ』――

高木のその言葉に新一は凍りついた

何か良からぬ事が起きているということはまだ知らない灰原や博士、探偵団の三人にもコナンのその表情から予想できた

「江戸川君…？」

「コナン君…？」

コナンの時は数十秒止まっていた

応答のない新一へ向けて高木が呼ぶ

『おい、工藤君！』

その呼び掛けに反応しコナンは我に返った

明かされる扉の前で…

どうやら帝丹小学校の爆破は一部だけ、また怪我人が数名いるだけで皆無事のようなった

コナンはその状況と元太達が無断で早退してきてしまったが今ここにちゃんという事を確認しホッとする

この状況からコナンや灰原は探偵団の三人を連れていかざるを得なくなった

「蘭さん達はどうするの？」

冷や汗を垂らすコナンに灰原が問い掛ける

「何が目的かは知らねえしもしこれが組織の仕業だとしてもこのやり方はただの挑発にすぎねえ…」

「まあそうね、組織の仕業なら私達は第一に殺されているわ…こんな自ら正体を暴いてしまうかもしれない危険なやり方なんてしないでしょうね」

「ああ、確定はできねえが蘭は心配ない…こいつらも大丈夫だろうけど万が一ってことがあるから一応連れていく」

「言うことも聞かねえしな?…」

三人の顔を見るとそれはそれは嬉しそうにしていた

「まあ、もう一度俺等の近辺でなにかあった時にまた考えようぜ！
今はとにかく沖縄へ行って白黒つけようじゃねえか？」

コナンがそう言うと同様は沖縄に向かうために駅へ向かった

それぞれの親には博士も同行でキャンプへ行くと電話を入れた

たまたま明日は学校が休みなのと信頼されている博士からの電話と
のことで親達はあっさりと承諾した

明かされる扉の前で…（後書き）

もし黒の組織の仕業なら一刻を争うこともあり用が済めばすぐに帰ってくることから探偵団の三人は何も持たずに颯爽と旅へ出た

その間コナンは新一として蘭にメールを入れていた

【さつきはわりいな…

蘭、もしお前の身の回りで変なことがあったらすぐに連絡しろよ？

詳しいことはまたあとで。 新一】

そして先程連絡した人物から返事のメールが届いた

【ええで、任しとき！ 服部】

コナンはそれを確認すると携帯を閉じて旅へと繰り出した

不可解な点

その日の夕方、帝丹小学校爆破事件で学校が早引きになってしまい
暇な園子と世良は蘭と共に毛利探偵事務所でくつろいでいた

「ねえ、コナン君は？」

ふと気付いた世良が蘭に問い掛けた

「あーコナン君は博士ん家で遊んでるみたい」

「じゃなくて大丈夫だったの？」

「あ、うん、丁度その時外にいたみたいで何ともないみたい」

帝丹小学校が爆発したと聞いた蘭はすぐにコナンの携帯に電話して
いた

モヤモヤしたままでコナンに電話をしたが電話の向こうでのコナン
は特にいつもと変わらず…、強いてゆうならかなり焦っていたが自
分の通う小学校がこんなことになってしまったのだから当然だろう
と思った蘭

“博士ん家泊まるから晩飯いらねえ”

新一のその言葉が頭の中を駆け巡っていた

（まさか…ね？）

コナンを何度も新一だと疑ってきたが最近はそんなものは全然なかった

ここでまたこの気持ちと再会することになるとは思ってもいなかった

絶対におかしいと思う蘭はもう一度確かめようと新一やコナンに電話をしたが二人とも留守電になってしまっていた

ますます怪しいと思う中、蘭は園子や世良を連れて阿笠邸へと向かうことにした

（ちょっと卑怯だけど… コナン君がもし新一ならこうしてはかせ
るしかないものね）

（それにもしそうだとしたら騙しているあいつの方が卑怯よ！）

強くそう思う蘭の眼差しは鋭かった

不可解な点（後書き）

阿笠邸に向かう途中に自分の想いを園子や世良にも聞いてみたがあっさり否定された

「ないない、だいたいどうしたら体が縮むのよ」

笑いながら否定する園子

「そんな薬があつたら僕も欲しいな」

そう言う世良

世良の発言は否定なのか肯定なのか分からないが今の会話に関する何かを隠しているということはこの瞬間明かされた

何故なら不適な笑みを浮かべながら蘭を見つめていたからだ

ただそれは蘭も園子も気付いてはいなかった

乱発の接触 再会編 (前書き)

その頃…

この地球上の何処かでは電波を使い何やら怪しげな会話をしている人物がいた

「そっちはどお？」

「ああ、とりあえず大丈夫だ」

「そう、よかったわね」

「ああ…」

「フッフ、なんのつもりか知らないけど私の邪魔だけはしないで頂戴？」

「時によるかな？」

「フン、その時は私が手柄を立てさせてもらっわ… あなたの正体をばらしてね？」

「なかなかの脅しだな、じゃあな」

乱発の接触 再会編

そして目的地へと降り立ったコナン率いる一同は一旦ホテルへと入った

現在時刻は夜7時

お腹を空かした探偵団の三人を連れて博士はレストラン街へと向かった

回想***

「新一！クリス・ヴィンヤードはこれから首里城付近で撮影を始めるらしいぞ！」

一時間前の出来事だった

「サンキュー博士、あと…度々わりいんだけどあいつらを連れ出してくれねえか？」

さすがにベルモットの前に探偵団の三人を連れていくのは危険すぎると思ったコナンは博士にそう伝えた

「私も行くわ」

真っ直ぐコナンを見つめて灰原はそう言った

そして現在に至った

「ねえ、ベルモットが組織の事を喋るとでも思ってるの？」

撮影しているベルモットの上の橋から撮影風景を見下ろしながら灰原はコナンに聞いた

「話すとは思ってねえし別に俺はそれを聞きにきたんじゃない」

「えっ？」

「じゃあ一体何しに来たの？」

「もちろんこれが組織の仕業だとしたらこの状況のことや俺達の問題も聞いてはおきたいがそれよりも先に聞いておかなきゃならねえことがあんだよ」

「……」

すると撮影が終わりベルモットは何処かへと歩き出した

「おめえはここで待ってる！」

そう言って駆け出して行くコナン

（相変わらずね…、だけど分かっているとは思うけど組織はあなたがいくつも解決してきた事件とは違ってグロいのよ…）

（工藤君、あなたはこの難題にどう立ち向かおうとしているの…）

乱発の接触 追求編

ベルモットを追いかけて数分…

ベルモット側も自分を睨む二人の人物の気配に気付いていないわけがなかった

ベルモットを見失ったコナンが辺りをキョロキョロ見回していると目的の人物が顔を出した

「わざわざここまで何の用？」

笑みを浮かべてコナンの前で一服を始めた

「何の用って…、俺がここまで何をしに来たか分かってるんじゃないかねのか？」

「あら、そんなに鋭くないわ？」

「フン、よく言うぜ？ 普段プライベートはもちろん仕事の事もまともに公にしねえおめえがこの状況の時に限って沖縄で撮影だなんて…、俺を呼んでるようなもんだろ？」

「フフ…、でも帝丹小学校に爆弾を仕掛けたのは私じゃないわ？」

「やっぱり…、組織の仕業か…、でもんなこたあどうでもいいんだよ」

「おめえら組織の目的は一体なんだ！？俺か？…それとも…」

ここで下を向くコナンにベルモットが語り始めた

「爆弾を仕掛けたのは私でもジンでも末端の人間でもないわ」

「！？　バーロ、だったら誰が…」

まさか組織の仕業じゃないなら誰がそんなことをするんだと言わんばかりの顔でコナンはベルモットを見つめる

するとベルモットは不適な笑みを浮かべてこう言った

「コードネームはバーボン、彼は組織の味方でも敵でもない男よ」

思いもよらない尋問

「バーボン…」

以前に水無怜奈から情報が入ったがコナンの耳にはそれっきりだった

「それと私とあいつらを一緒にしないでくれるかしら？」

「フッ… やってることは同じじゃねえか」

「だけど目的は違うわ」

コナンはベルモットを見つめながら灰原の言葉を思い出す

それに反論するかのようにコナンは問い掛けた

「おめえの目的は…、何なんだ？」

「あなたに言っ て何になるの？」

ベルモットはタバコの火を消しながらこう言った

「A s e c r e t m a k e s a w o m a n w o m a n…」

「秘密は女を女にする… またそれかよ？その言葉と何か関係があるのか？」

「…」

黙り込むベルモットにコナンは更に問い掛けた

「それと…おめえが関わってるその黒の組織ってえのはそんなに忙しいのか？」

「Why？」

唐突な質問に思わず英語で返す

「おめえの本来の姿のシャロンを死んだ事にしてまでクリス・ヴィンヤードを貫かなきゃなんねえほど忙しいのかって聞いてるんだ」

そう言うコナンの顔は何かを企んでいるかのような表情だった

知る必要のない応答

「バカね？私はもうシャロンでは…」

「やっぱりな？」

「えっ？」

「そうゆうところは相変わらず素直なんだな」

ベルモットは黙り込む

「おめえも俺等と同じ運命共同体ってことか」

「…」

「まあそうだよな？人が縮むなんて誰も夢になんか思わねえ、マウス実験で試すまでもねえ…」

「仮にそう思うとしたらそれはあの毒薬を作った張本人か、または…」

「俺等がこの姿になっちまった時にはもうすでに同様の現状に陥っている人物か…」

見るとベルモットの顔色は悪くなっていた

「だったら何？」

「えっ？」

「私はこの姿を手に入れたくて自らあの毒薬を飲んだわ、あなたとは違ってね？」

コナンは鋭くベルモットを睨んだ

「今日は私の降参だわ、いや…“今日も”だったわね」

そう言うベルモットは去ろうとする

「もう一つ、聞いていいか？」

そうコナンが呼び止めベルモットは振り向く

「おめえ、世良真純ってやつ知ってるか？」

「！？」

その瞬間完全にベルモットのポーカーフェイスは崩れた

「凶星だな？」

ベルモットは不適な笑みを取り戻し最後に胸元に手を当て小声でこ
う言った

「Need not to know…」

そう言い残して去って行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210z/>

『名探偵コナン ～暁への導き（リード）～』

2011年12月3日19時50分発行